歎異抄

目次（左に並んだ各条をクリック又はタップするとその頁に移動します。）

序　竊に愚案を回らしてほぼ古今を勘ふるに
第一条　弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて
第二条　おの〳〵十余ヶ国のさかひをこえて
第三条　善人なほもて往生をとぐ
第四条　慈悲に聖道・浄土のかはりめあり
第五条　親鸞は父母の孝養のためとて
第六条　専修念仏のともがらの
第七条　念仏者は無碍の一道なり
第八条　念仏は行者のために、非行・非善なり
第九条　念仏申しそふらへども、踊躍歓喜のこころ
第十条　念仏には無義をもつて義とす
第十一条　一文不通のともがらの念仏申すにあうて
第十二条　経釈をよみ学せざるともがら
第十三条　弥陀の本願不思議におはしませばとて
第十四条　一念に八十億劫の重罪を滅す
第十五条　煩悩具足の身をもて

前頁
次頁

前頁

目次（左に並んだ各条をクリック又はタップするとその頁に移動します。）

第十六条　信心の行者、自然にはらをもたて
第十七条　辺地往生をとぐるひと
第十八条　仏法のかたに、施入物の多少にしたがひて
結文　右条々は、みなもて信心のことなるより
会社情報・コピーライト表示

次頁

序

竊かに愚案をめぐらして、ほぼ古今を勘ふるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑あることを思ふに、幸に有縁の知識に依らずんば、争でか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覚悟を以て、他力の宗旨を乱ることなかれ。仍て故親鸞聖人の御物語の趣、耳の底に留むるところ、聊か之を注す。偏へに同心行者の不審を散ぜんが為なりと云々。

第一条

一、弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まふさんとおもひたつこゝろのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にましまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も

要にあらず、念仏にまさるべき善なきがゆへに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆへにと云々。

第二条

一、おの〳〵十余ヶ国のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極楽のみちをとひきかんがためなり。しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にもゆゆしき学匠たちおほ

く座せられてさふらうなれば、かのひとにもあひたてまつりて、往生の要よく〳〵きかるべきなり。親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じても存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念

仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自余の行もはげみて仏になるべかりける身が、念仏をまふして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言し

たまふべからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらふか。詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと云々。

第三条

一、善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をや。この条、一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、

真実報土の往生をとぐるなり。煩悩具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。

第四条

一、慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。浄土の慈悲といふは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始

終なし。しかれば、念仏まふすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと云々。

第五条

一、親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念仏まふしたること、いまださふらはず。そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれも〳〵この順次生に仏になりてたすけさふらふべきなり。わがちからにてはげむ善にてもさふらはゞこそ、念仏を廻向して父母をもたすけさふらはめ。たゞ自力をすてゝ、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道・

四生のあひだ、いづれの業苦に
しづめりとも、神通方便をもて、
まづ有縁を度すべきなりと云々。

第六条

一、専修念仏のともがらの、わが弟子ひとの弟子といふ相論のさふらふらんこと、もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたずさふらふ。そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念仏をまふさせさふらはゞこそ、弟子にてもさふらはめ。弥陀の御もよほしにあづかて念仏まふしさふらふひとを、わが弟子とまふすこと、きはめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればとも

なひ、はなるべき縁あればはなるゝことのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなんどいふこと、不可説なり。如来よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまふすにや。かへすゞもあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々。

第七条

一、念仏者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障碍することなし。罪悪も業報を感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆへなりと云々。

第八条

一、念仏は行者のために非行・非善なり。わがはからひにて行ずるにあらざれば、非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば、非善といふ。ひとへに他力にして自力をはなれたるゆへに、行者のためには非行・非善なりと云々。

第九条

一、念仏まふしさふらへども、踊躍歓喜のこゝろおろそかにさふらふこと、またいそぎ浄土へまひりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まふしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこゝろにてありけり。よく〳〵案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよ〳〵

往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきこゝろをおさへてよろこばざるは、煩悩の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよ〳〵たのもしくおぼゆるなり。また浄土へいそぎまひりたきこゝろのなくて、いさゝか所労のこともあれば、死なんずるやらんとこゝろぼそくおぼ

ゆることも、煩悩の所為なり。久遠劫よりいまゝで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだむまれざる安養の浄土はこひしからずさふらふこと、まことによく〳〵煩悩の興盛にさふらふにこそ。なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておはるときに、かの土へはまひるべきなり。いそぎまひりたきこゝろなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよ〳〵大悲大願

はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ。踊躍歓喜のこゝろもあり、いそぎ浄土へもまひりたくさふらはんには、煩悩のなきやらんとあやしくさふらひなましと云々。

第十条

一、念仏には無義をもて義とす。不可称不可説不可思議のゆへにとおほせさふらひき。そもゝかの御在生のむかし、おなじくこゝろざしをして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして、心を当来の報土にかけしともがらは、同時に御意趣をうけたまはりしかども、そのひとゞにともなひて念仏まふさるゝ老若、そのかずをしらずおはしますなかに、上人のおほ

せにあらざる異義どもを、近来はおほくおほせられあふてさふらふよし、つたへうけたまはる。いはれなき条々の子細のこと。

第十一条

一、一文不通のともがらの念仏まふすにあふて、なんぢは誓願不思議を信じて念仏まふすか、また名号不思議を信ずるかといひおどろかして、ふたつの不思議の子細をも分明にいひひらかずして、ひとのこゝろをまどはすこと、この条かへすぐ〳〵もこゝろをとゞめて、おもひわくべきことなり。誓願の不思議によりて、やすくたもち、となへやすき名号を案じいだしたまひて、この名字をとなへんも

のをむかへとらんと御約束あることなれば、まづ弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまひらせて生死をいづべしと信じて、念仏のまふさるゝも、如来の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからのはからひまじはらざるがゆへに、本願に相応して実報土に往生するなり。これは誓願の不思議をむねと信じたてまつれば、名号の不思議も具足して、誓願・名号の不思議ひとつにして、さらにことなるこ

となきなり。　つぎにみづからのはからひをさしはさみて、善悪のふたつにつきて、往生のたすけさはり、二様におもふは、誓願の不思議をばたのまずして、わがこころに往生の業をはげみてまふすところの念仏をも自行になすなり。　このひとは名号の不思議をもまた信ぜざるなり。信ぜざれども、辺地・懈慢・疑城胎宮にも往生して、果遂の願のゆへに、つひに報土に生ずるは、名号不思議のちからなり。

これすなはち、誓願不思議のゆへなれば、たゞひとつなるべし。

第十二条

一、経釈をよみ学せざるともがら、往生不定のよしのこと。この条すこぶる不足言の義といひつべし。他力真実のむねをあかせるもろ〳〵の正教は、本願を信じ念仏をまふさば仏になる、そのほかなにの学問かは往生の要なるべきや。まことに、このことわりにまよへらんひとは、いかにも〳〵学問して、本願のむねをしるべきなり。経釈をよみ学すといへども、聖教の本意

をこゝろえざる条、もとも不便のことなり。一文不通にして、経釈のゆくぢもしらざらんひとの、となへやすからんための名号におはしますゆへに、易行といふ。学問をむねとするは聖道門なり、難行となづく。あやまて学問して名聞・利養のおもひに住するひと、順次の往生いかゞあらんずらんといふ証文もさふらふべきや。当時、専修念仏のひとゝ聖道門のひと、法論をくはだてゝ、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりな

りといふほどに、法敵もいでき
たり、謗法もおこる。これしか
しながら、みずからわが法を破
謗するにあらずや。たとひ諸門
こぞりて、念仏はかひなきひと
のためなりその宗あさしいやし
といふとも、さらにあらそはず
して、われらがごとく下根の凡
夫、一文不通のものゝ、信ずれ
ばたすかるよし、うけたまはり
て信じさふらへば、さらに上根
のひとのためにはいやしくとも、
われらがためには最上の法にて

ます。たとひ自余の教法すぐれたりとも、みづからがためには器量およばざればつとめがたし。われもひとも生死をはなれんことこそ諸仏の御本意にておはしませば、御さまたげあるべからずとて、にくひ気せずば、たれのひとかありて、あだをなすべきや。かつは諍論のところにはもろ〳〵の煩悩おこる、智者遠離すべきよしの証文さふらふにこそ。故聖人のおほせには、この法をば信ずる衆生もあり、

そしる衆生もあるべしと、仏ときおかせたまひたることなれば、われはすでに信じたてまつる。また、ひとありてそしるにて、仏説まことなりけりと、しられさふらふ。しかれば往生はいよ〳〵一定とおもひたまふべきなり。あやまてそしるひとのさふらはざらんにこそ、いかに信ずるひとはあれども、そしるひとのなきやらんともおぼえさふらひぬべけれ。かくまふせばとて、かならずひとにそしられんとに

はあらず、仏のかねて信謗ともにあるべきむねをしろしめして、ひとのうたがひをあらせじと、ときおかせたまふことをまふすなりとこそさふらひしか。いまの世には、学文してひとのそしりをやめ、ひとへに論議問答むねとせんと、かまへられさふらふにや。学問せば、いよ〳〵如来の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかゞなんど、あやぶまんひとにも、本願には善悪浄穢なきおもむきをも

説ききかせられさふらはばこそ、学生のかひにてもさふらはめ。たまくなにごころもなく、本願に相応して念仏するひとをも、学問してこそなんどいひおどさるること、法の魔障なり、仏の怨敵なり。みづから他力の信心かくるのみならず、あやまて他をまよはさんとす。つゝしんでおそるべし、先師の御こゝろにそむくことを。かねてあはれむべし、弥陀の本願にあらざることを。

第十三条

一、弥陀の本願不思議におはしませばとて、悪をおそれざるは、また本願ぼこりとて、往生かなふべからずといふこと。この条、本願をうたがふ、善悪の宿業をこゝろえざるなり。よきこゝろのおこるも、宿善のもよほすゆへなり。悪事のおもはれせらるゝも、悪業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには、卯毛・羊毛のさきにいるちりばかりも、つくるつみの、宿業にあらずと

いふことなしとしるべしとさふらひき。またあるとき、唯円房はわがいふことをば信ずるかと、おほせのさふらひしあひだ、さんさふらふと申しさふらひしかば、さらばいはんことたがふまじきかと、かさねておほせのさふらひしあひだ、つゝしんで領状まふしてさふらひしかば、たとへば、ひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべしとおほせさふらひしとき、おほせ

にてはさふらへども、一人もこの身の器量にてはころしつべしともおぼえずさふらふとまふしてさふらひしかば、さてはいかに親鸞がいふことをたがふまじきとはいふぞと。これにてしるべし、なにごともこゝろにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども一人にてもかなひぬべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこゝろのよくてころさぬにはあ

らず。また害せじとおもふとも百人・千人をころすこともあるべしとおほせのさふらひしは、われらがこゝろのよきをばよしとおもひ、悪しきことをば悪しとおもひて、願の不思議にてたすけたまふといふことをしらざることを、おほせのさふらひしなり。そのかみ邪見におちたるひとあて、悪をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて往生の業とすべきよし

をいひて、やう〳〵にあしざまなることのきこへさふらひしとき、御消息に、くすりあればとて毒をこのむべからずとあそばされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり。またく悪は往生のさはりたるべしとにはあらず。持戒・持律にてのみ本願を信ずべくは、われらいかでか生死をはなるべきやと。かゝるあさましき身も、本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさふらへ。さればとて、身に

そなへざらん悪業は、よもつくられさふらはじものを。また、うみかわにあみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまにしゝをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきなひをし、田畠をつくりてすぐるひとも、ただおなじことなりと。さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべしとこそ、聖人はおほせさふらひしに、当時は後世者ぶりして、よからんものばかり念仏まふすべきや

うに、あるひは道場にわりぶみをして、なむ〳〵のことしたらんものをば、道場へいるべからずなんど、いふこと、ひとへに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚仮をいだけるものか。願にほこりてつくらんつみも、宿業のもよほすゆへなり。さればよきこともあしきことも業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまひらすればこそ、他力にてはさふらへ。唯信抄にも、弥陀いかばかりのちからましますとしりてか、罪

業のみなれば、すくはれがたしとおもふべきとさふらふぞかし。本願にほこるこゝろのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにてさふらへ。おほよそ、悪業煩悩を断じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にほこるおもひもなくてよかるべきに、煩悩を断じなば、すなはち仏になり、仏のためには五劫思惟の願、その詮なくやましまさん。本願ぼこりといましめらるゝひとゞくも、煩悩不

浄具足せられてこそさふらうげなれ。それは願にほこらるゝにあらずや。いかなる悪を本願ぼこりといふ、いかなる悪かほこらぬにてさふらふべきぞや。かへりてこゝろをさなきことか。

第十四条

一、一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしといふこと。この条は、十悪・五逆の罪人、日ごろ念仏をまふさずして、命終のときはじめて善知識のをしへにて、一念まふせば八十億劫のつみを滅し、十念まふせば十八十億劫の重罪を滅して往生すといへり。これは十悪・五逆の軽重をしらせんがために、一念・十念といへるか。滅罪の利益なり。いまだわれらが信ずるところにおよ

ばず。そのゆへは、弥陀の光明にてらされまゐらするゆへに、一念発起するとき金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて、命終すれば、もろ〳〵の煩悩悪障を転じて、無生忍をさとらしめたまふなり。この悲願ましまさずば、か、るあさましき罪人、いかでか生死を解脱すべきとおもひて、一生のあひだまふすところの念仏は、みなことゞく如来大悲の恩を報じ徳を謝す

とおもふべきなり。念仏まふさんごとに、つみをほろぼさんと信ぜんは、すでにわれとつみをけして往生せんとはげむにてこそさふらふなれ。もししからば、一生のあひだおもひとおもふこと、みな生死のきづなにあらざることなければ、いのちつきんまで念仏退転せずして往生すべし。たゞし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のことにもあひ、また病悩苦痛をせめて、正念に住せずしてをはらん、

念仏まふすことかたし。そのあひだのつみをば、いかゞして滅すべきや。つみ消えざれば、往生はかなふべからざるか。摂取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる不思議ありて罪業をおかし、念仏まふさずしてをはるとも、すみやかに往生をとぐべし。また念仏のまふされんも、たゞいまさとりをひらかんずる期のちかづくにしたがひても、いよ〳〵弥陀をたのみ、御恩を報じたてまつるにてこそさふら

はめ。つみを滅せんとおもはんは自力のこゝろにして、臨終正念といのるひとの本意なれば、他力の信心なきにてさふらふなり。

第十五条

一、煩悩具足の身をもて、すでにさとりをひらくといふこと。

この条、もてのほかのことにさふらふ。即身成仏は真言秘教の本意、三密行業の証果なり。六根清浄はまた法花一乗の所説、四安楽の行の感徳なり。これみな難行上根のつとめ、観念成就のさとりなり。来生の開覚は他力浄土の宗旨、信心決定の道なるがゆへなり。これまた易行下根のつとめ、不簡善悪の法なり。

おほよそ今生においては、煩悩悪障を断ぜんこと、きはめてありがたきあひだ、真言・法花を行ずる浄侶、なほもて順次生のさとりをいのる。いかにいはんや、戒行・慧解ともになしといへども、弥陀の願船に乗じて生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩悩の黒雲はやくはれ、法性の覚月すみやかにあらはれて、尽十方の無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときにこそ、

さとりにてはさふらへ。この身をもてさとりをひらくとさふらふなるひとは、釈尊のごとく種々の応化の身をも現じ、三十二相・八十随形好をも具足して、説法利益さふらふにや。これをこそ今生にさとりをひらく本とはまふしさふらへ。和讃にいはく、金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ、弥陀の心光摂護して、ながく生死をへだてけるとさふらへば、信心の定まるときに、ひとたび摂取してすてたまはざれば、六道に

輪廻すべからず。しかれば、ながく生死をばへだてさふらふぞかし。かくのごとくしるを、さとるとはいひまぎらかすべきや。あはれにさふらふをや。浄土真宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならひさふらふぞとこそ、故聖人のおほせにはさふらひしか。

第十六条

一、信心の行者、自然にはらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあひて口論をもしては、かならず廻心すべしといふこと。この条、断悪修善のこゝちか。一向専修のひとにおいては、廻心といふこと、たゞひとたびあるべし。その廻心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の知恵をたまはりて、日ごろのこゝろにては往生かなふべからずとおもひて、

もとのこゝろをひきかへて、本願をたのみまひらするをこそ、廻心とはまふしさふらへ。一切の事に、あしたゆふべに廻心して、往生をとげさふらうべくば、ひとのいのちは、いづるいきいるほどをまたずしてをはることなれば、廻心もせず柔和・忍辱のおもひにも住せざらんさきに、いのちつきば、摂取不捨の誓願はむなしくならせおはしますべきにや。くちには願力をたのみたてまつるといひて、こ

ゝろにはさこそ悪人をたすけんといふ願、不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそ、たすけたまはんずれとおもふほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまゐらするこゝろかけて、辺地の生をうけんこと、もともなげきおもひたまふべきことなり。信心定まりなば、往生は弥陀にはからはれまひらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。わろからんにつけてもいよ〳〵願力をあをぎ

まひらせば、自然のことはりにて、柔和・忍辱のこころもいでくべし。すべてよろづのことにつけて、往生にはかしこきおもひを具せずして、たゞほれ〴〵と弥陀の御恩の深重なること、つねはおもひいだしまひらすべし。しかれば、念仏もまふされさふらふ。これ自然なり。わがはからはざるを、自然とまふすなり。これすなはち他力にてまします。しかるを、自然といふことの別にあるやうに、われものしりがほにいふひとのさふ

らふよしうけたまはる、あさまし
くさふらふ。

第十七条

一、辺地往生をとぐるひと、つひには地獄におつべしといふこと。この条、なにの証文にみへさふらふぞや。学生だつるひとのなかに、いひいださるゝことにてさふらふなるこそ、あさましくさふらへ。経論正教をば、いかやうにみなされてさふらふらん。信心かけたる行者は、本願をうたがふによりて、辺地に生じてうたがひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひら

くとこそ、うけたまはりさふらへ。信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすゝめいれられさふらふを、つひにむなしくなるべしとさふらふなるこそ、如来に虚妄をまふしつけまひらせられさふらふなれ。

第十八条

一、仏法のかたに、施入物の多少にしたがひて大小仏になるべしといふこと。この条、不可説なり〳〵、比興のことなり。まづ仏に大小の分量をさだめんこと、あるべからずさふらふか。かの安養浄土の教主の御身量を説かれてさふらふも、それは方便報身のかたちなり。法性のさとりをひらひて、長短方円のかたちにもあらず、青黄赤白黒のいろをもはなれなば、なにをもてか

大小をさだむべきや。念仏まふすに、化仏をみたてまつるといふことのさふらふなるこそ、大念には大仏をみ、小念には小仏をみるといへるか。もしこのことわりなんどにばし、ひきかけられさふらふやらん。かつはまた檀波羅蜜の行ともいひつべし、いかにたからものを仏前にもなげ、師匠にほどこすとも、信心かけなばその詮なし。一紙半銭も仏法のかたにいれずとも、他力にこゝろをなげて、信心ふか

くば、それこそ願の本意にてさふらはめ。すべて仏法にことをよせて、世間の欲心もあるゆへに、同朋をいひをどさるゝにや。

結文

右条々は、みなもて信心のことなるより、ことおこりさふらふか。故聖人の御ものがたりに、法然聖人の御とき、御弟子そのかずおはしけるなかに、おなじく御信心のひともすくなくおはしけるにこそ、親鸞御同朋の御なかにして御相論のことさふらひけり。そのゆへは、善信が信心も聖人の御信心も一つなりとおほせのさふらひければ、勢観房・念仏房なんどまふす御同朋

達、もてのほかにあらそひたまひて、いかでか聖人の御信心に、善信房の信心ひとつにはあるべきぞとさふらひければ、聖人の御知恵才覚ひろくおはしますにひとつならんとまふさばこそひがごとならめ、往生の信心においては、またくことなることなし、たゞひとつなりと御返答ありけれども、なをいかでかその義あらんといふ疑難ありければ、詮ずるところ、聖人の御まへにて、自他の是非をさだむべきに

て、この子細をまふしあげければ、法然聖人のおほせには、源空が信心も如来よりたまはりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまはらせたまひたる信心なり。さればたゞひとつなり。別の信心にておはしまさんひとは、源空がまひらんずる浄土へは、よもまひらせたまひさふらはじと、おほせさふらひしかば、当時の一向専修のひとゞのなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御こともさふらふらんと

おぼえさふらふ。いづれも〳〵繰り言にてさふらへども、かきつけさふらふなり。露命わづかに枯草の身にかゝりてさふらふほどにこそ、あひともなはしめたまふひとゞ〳〵、御不審をもうけたまはり、聖人のおほせのさふらひしおもむきをも、まふしきかせまひらせさふらへども閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにてさふらはんずらめと、なげき存じさふらひて、かくのごとくの義ども、おほせら

れあひさふらふひとゞくにも、いひまよはされなんどせらるゝことのさふらはんときは、故聖人の御こゝろにあひかなひて御もちゐさふらふ御聖教どもを、よくゝ御覧さふらふべし。おほよそ聖教には、真実・権仮ともにあひまじはりさふらふなり。権をすてゝ実をとり、仮をさしおきて真をもちゐるこそ、聖人の御本意にてさふらへ。かまへてゝ聖教をみ、みだらせたまふまじくさふらふ。大切の証文

ども、少々ぬきいでまひらせさふらふて、目やすにして、この書に添へまゐらせてさふらふなり。聖人のつねのおほせには、弥陀の五劫思惟の願をよくく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ、と御述懐さふらひしことを、いままた案ずるに、善導の、自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫

よりこのかた、つねにしづみつねに流転して、出離の縁あることなき身としれといふ金言に、すこしもたがはせおはしまさず。されば、かたじけなく、わが御身にひきかけて、われらが身の罪悪のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよへるを、おもひしらせんがためにてさふらひけり。まことに如来の御恩といふことをばさたなくして、われもひとも、よしあしといふことをのみ

まふしあへり。聖人のおほせには、善悪のふたつ、総じてもて存知せざるなり。そのゆへは、如来の御こゝろに善しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたはごと、まことあることなきに、たゞ念仏のみぞま

ことにておはしますとこそおほせはさふらひしか。まことに、われもひとも、そらごとをのみまふしあひさふらふなかに、ひとついたましきことのさふらふなり。そのゆへは、念仏まふすについて、信心のおもむきをもたがひに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論をたゝんために、またくおほせにてなきことをもおほせとのみまふすこと、あさましくなげき存じさふらふなり。

このむねをよく〳〵おもひとき、こゝろえらるべきことにさふらふ。これさらにわたくしのことばにあらずといへども、経釈のゆくぢもしらず、法文の浅深をこゝろえわけたることもさふらはねば、さだめてをかしきことにてこそさふらはめども、古親鸞のおほせごとさふらひしおもむき、百分が一つ、かたはしばかりをもおもひいでまひらせて、かきつけさふらふなり。かなしきかなや、さひはひに念仏しな

がら、直に報土にむまれずして、辺地にやどをとらんこと。一室の行者のなかに信心異なることなからんために、なく〳〵ふでを染めてこれをしるす。なづけて歎異抄といふべし。外見あるべからず。

歎異抄

序

ひそかにおろかな思いをめぐらして、

窃かに愚案をめぐらして、ほぼ

おおよそ、昔と今

古今を勘ふるに、先師の口伝の真

（親鸞聖人が在世の昔と亡世の今）を思い考えると、　先師（親鸞聖人）より言い伝えられた真実の信心

信に異なることを歎き、後学相続

と異なる教えがあることを嘆き、　後人が教えを学び受け継い

の疑惑あることを思ふに、幸に有

ていくにあたり疑いや惑いが生じるであろうことを思うに、　幸いにも（私が）

縁の知識に依らずんば、争でか易

よき師の教えを受けるというご縁をいただかなければ、　どうしてこの易行の念仏の

行の一門に入ることを得んや。全

教えに入門することができたであろう。　まったく

く自見の覚悟を以て、他力の宗旨

（決して）自分の勝手な理解のみで、　他力念仏の教えの本旨を取り違え

を乱ることなかれ。仍て故親鸞聖

ることがあってはならない。　よって（そこで）亡き親鸞聖人からお聞

人の御物語の趣、耳の底に留むる

きしたお話の中で、　耳の底に留まっている（印象深く忘れられない）

ところ、聊か之を注す。偏へに同

ところ（お話）、　少しばかりこれを書き記しておく。　ひとえに（私と）同じく念仏

心行者の不審を散ぜんが為なりと

の教えを求める者たちの不審をなくそうとするためである（したいからである）。

云々。

第一条

一、一切衆生を救い取るという阿弥陀仏の誓願の不思議な働きにたすけられて、

一、弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて、極楽浄土に生まれる（死ねば極楽浄土へ行く）往生をばとぐると信じて、念仏を称えようと思い立つ心のおこる時、念仏まふさんとおもひたつこゝろのおこるとき、その時すぐに、阿弥陀仏の念仏する人を光明の中に収め取って（救い取って）見捨てないという利益に預かりたまう（お恵みをいただく）のである。すなわち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。阿弥陀仏の本願には、老人とか若者とか善人とか悪人といった区別はない。弥陀の本願には、ただ信心だけが肝要（大切）であると知れ。老少善悪のひとをえらばれず、その理由（わけ）は、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、悪行を重ねて罪深く、煩悩の炎の燃え盛る衆生（私たち）を助けるための本願であるからだ。罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にましまします。それゆえに（だから）、しかれば本願を信ぜんには、阿弥陀仏の本願を信じれば、念仏以外の他のいかなる善も他の善も

必要はない、

念仏に勝る善はないからである。

要にあらず、念仏にまさるべき善なきがゆへに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆへにと云々。

（どんな）悪をも恐れることはない。

阿弥陀仏の本願をさまたげるほどの悪はないからである。

第二条

一、おのゝ十余ケ国のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極楽のみちをとひきかんがためなり。しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にもゆゆしき学匠たちおほ

一、みなさんが（関東から京都までの）十余カ国もの国境を越えて、命の危険をかえりみず（命がけで）、（私・親鸞を）訪ねてこられたその目的は、ただ極楽浄土に往生する（生まれる）道（方法）問いただそうとするためでありましょう。それなのに、（親鸞が）念仏より他に極楽浄土に往生するの（生まれる）道（方法）を知っており、また（それを書き記した）経文等を知っているだろうと、いぶかしく（不審に）お思いになっておられるのならば、（それは）大変な誤りです。もしそうならば、奈良や比叡山にもすぐれた学者の方々が多くいらっしゃるので、

く座せられてさふらうなれば、
その人たちにお会いになって、
かのひとにもあひたてまつりて、
極楽浄土に往生する要点をよくよくお聞きになるがよい。
往生の要よく〳〵きかるべきな
親鸞においては、
り。親鸞におきては、たゞ念仏
「ただ念仏して阿弥陀仏に助けていただきなさい」という、
して弥陀にたすけられまひらす
べしと、よきひとのおほせをか
善き人（法然上人）の仰ったことを受けて、
それを信じるより他に特別の理由（わけ）はないのだ。
ぶりて、信ずるほかに別の子細
念仏は、
本当に極楽浄土に生まれる因（種）
なきなり。念仏は、まことに浄
であろうか、
土にむまるゝたねにてやはんべ
また地獄に落ちる業（行為）なのであろうか。
るらん、また地獄におつべき業
すべて私の関知するところで
にてやはんべるらん。総じても
ではない。
たとえ法然上人にだまされて、
て存知せざるなり。たとひ法然
聖人にすかされまひらせて、念

念仏して地獄に落ちたとしても、
仏して地獄におちたりとも、さ
少しも後悔しないでしょう。
らに後悔すべからずさふらふ。
（もしも、）念仏以外の自力の修行にはげんで仏になるはず
その理由（わけ）は、
そのゆへは、自余の行もはげみ
の自分が、
て仏になるべかりける身が、念
念仏を称えて地獄に落ちたというのであれば、
仏をまふして地獄にもおちてさ
だまされたという後悔もおこるだろう。
ふらはばこそ、すかされたてま
つりてといふ後悔もさふらはめ。
（しかし）どんな修行もできない身であれば、
いづれの行もおよびがたき身な
どうしてみても（結局）地獄は私の定められたすみかなのだ。
れば、とても地獄は一定すみか
阿弥陀仏の本願が真実であるなら、
ぞかし。弥陀の本願まことに
お釈迦さま（釈迦仏）の説かれた教えは虚言（嘘偽
おはしまさば、釈尊の説教虚言
釈迦仏の説かれた教えが真実ならば、
り）ではない。
なるべからず。仏説まことにお
はしまさば、善導の御釈虚言し
善導大師の解釈された（釈迦仏の）教えは虚言（嘘偽り）

ではない。

たまふべからず。善導の御釈（善導大師の解釈された（釈迦仏の）教えが）ま

ことならば、法然のおほせそら（法然上人の説かれた教えが（どうして）虚言（嘘偽り）で）

ごとならんや。法然のおほせま（法然上人の説かれた教えが真実ならば、）

ことならば、親鸞がまふすむね、（親鸞が申すことも、）

またもてむなしかるべからずさ（また以て虚しいたわごとではないといえるだろう。）

ふらふか。詮ずるところ、愚身（つまるところ（要するに）、）（愚かな身の私）

の信心におきてはかくのごとし。（この（今述べてきた）ようなものである。）

このうへは、念仏をとりて信じ（念仏をとって（選んで）信じようとも、）

たてまつらんとも、またすてん（また（念仏を）捨てようとも、）

とも、面々の御はからひなりと（みなさん一人一人のお考え次第である。）

云々。

第三条

一、善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をや。この条、一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、

一、善人なほもて往生をとぐ、（善人でさえ極楽浄土へ往生できる、ところが、世の中の人は常に（次のように）いう、まして悪人が（往生できないはずはない）。）

悪人でさえ極楽浄土へ往生できる、まして善人が極楽浄土へ往生できるのはいうまでもない。

これ（この言葉は）、一応もっともな道理があるように思われるが、阿弥陀仏の本願他力のこころに背いている。

その理由（わけ）は、自力で（善を積んで悟りを開こうとする人は、ひとすじに他力（阿弥陀仏の本願の働き）を信じてそれをたのむ心が欠けているので、阿弥陀仏の本願に背くものである。）

けれども、（そのような人も）自力のこころを翻して、他力を信じてそれをたのめば、

阿弥陀仏のおられる真実の浄土へ往生をとげることができるのである。

真実報土の往生をとぐるなり。

いかなる修行を自力で行っ

煩悩にまみれた私たちは、

煩悩具足のわれらは、いづれの

ても生死（輪廻転生）を離れることができないことをあわれんで、

行にても生死をはなるゝことあ

るべからざるをあはれみたまひ

て、願をおこしたまふ本意、悪

本願をおこされた阿弥陀仏の本心は、

このよ

うな悪人（煩悩にまみれた私たち）を仏にするためであるので、

人成仏のためなれば、他力をた

阿弥陀仏の本願他力をたのむ

悪人（煩悩にまみれた私たち）は、

もっともすぐれた極楽浄土に

のみたてまつる悪人、もとも往

往生するための正しい因（種）なのである。

よって善人でさえ浄土へ往生できる、

生の正因なり。よて善人だにこ

そ往生すれ、まして悪人はと、

まして悪人が（往生できないはずはない）と、

おっしゃったのである。

おほせさふらひき。

第四条

一、慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、もの（慈悲に聖道の慈悲と浄土の慈悲の違いがある。）（聖道の慈悲というのは、）（生きとし生けるものを憐れみ、）をあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとく（慈しみ、）（守り育てるものである。）（思い通りに（生きとし生けるものを）救い助けることは、）（きわめてあり得ない（困難な））たすけとぐること、きはめてありがたし。浄土の慈悲といふは、（（一方）浄土の慈悲というのは、）（ことである。）念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始（自分自身が念仏を称えて極楽浄土に往生して仏となって、）（大慈大悲の心でもって、）（思い通りに生きとし生けるものを救うこと）（仏の）（をいうのである。）（この世で、）（どんなにいたわしい、気の毒だと思っても、）（思い通りに助けることはできないので、）（この（聖道）慈悲は首尾一貫してい）

ない。

終なし。ならば、しかれば、念仏まふすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと云々。

念仏を称えることのみが、最後まで一貫した大慈悲の心なのである。

第五条

一、親鸞は、父母の孝養のためとて、一度たりとも念仏を称えたことは、一返にても念仏まふしたること、いまだかってない。いまださふらはず。その理由（わけ）は、すべてのいのちあるもの（生きとし生けるもの）は、みんな生まれ変わり死に変わり（輪廻転生）を繰り返して経る世の父母であり兄弟である。だれもかれもがこの次に生まれ変わる時は、（極楽浄土に生まれて）仏となって（輪廻転生を繰り返す人々を）助け（救い）だすのである。

のゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれも〳〵この順次生に仏になりてたすけさふらふべきなり。（もし念仏が）自力をもって積んでいく善（善行）であるならば、わがちからにてはげむ善にてもさふらはゞこそ、念仏をふりむけて父母を助けるということ念仏を廻向して父母をもたすけさふらはめ。もあるだろう。ただ自力で悟りをひらこうとする（自力にとらわれた）心を捨てて、（念仏を称えることで、）死ねばすぐたゞ自力をすてゝ、いそぎ浄土に極楽浄土に生まれ変わり、悟りをひらくならば、のさとりをひらきなば、六道・輪廻転生における

六道四生の迷いの世界において、

四生のあひだ、しづめりとも、まづ有縁を度すべきなりと云々。

まず縁のある身近な人々を助けていくのである。

どんな苦しみに沈んでいたとしても、

いづれの業苦に神通方便をもて、

仏の自由自在に衆生を助ける（救う）手立てでもって、

前頁

次頁

目次

非表示

第六条

一、専修念仏のともがらの、わ（念仏のみに専念している仲間たちの中で、）（私の）が弟子ひとの弟子といふ相論のさふらふらんこと、もてのほか（弟子であるとか人の弟子であるとかいう争いのあること、）（もってのほかのことである。）の子細なり。親鸞は弟子一人ももたずさふらふ。そのゆへは、（親鸞は弟子を一人として持っていない。）（その理由は、）わがはからひにて、ひとに念仏をまふさせさふらはゞこそ、弟子にてもさふらはめ。弥陀の御もよほしにあづかて念仏まふしさふらふひとを、わが弟子とまふすこと、きはめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればとも（人に念仏を称えさせるようにしたと）（私自身の力で、）（いうのであれば、）（（しかし）ただひたすら阿弥陀）（（その人は））（弟子であるということもできる。）（仏の働きにうながされて念仏を称えている人を、）（自分の弟子であるということ、）（まったくもってとんでもないことである。）（付く（付き従う）べき縁があれば伴い（一緒に行動し）、）

なひ、はなるべき縁あればはなるゝことのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなんどいふこと、不可説なり。如来よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまふすにや。かへすがへすもあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々。

離れるべき縁があれば離れることもあるのに、

（これまでの）師に背いて、

他の人に付き従って念仏するならば（するような人は）、

極楽浄土に往生することはできないなどということ、

（これは）言語道断である。

阿弥陀如来

よりいただいた信心を、

わがもの顔

（いかにも自分が信心を与えたような顔）をして取り返そうというのだろうか。

（そんなことは）かえすがえす（決して）あってはならないことである。

自然のことはり（阿弥陀仏の本願他力の心）

にかなうならば、

（自ずから）仏の恩をも知り、

また師の恩をも知ることができるようになるはずである。

第七条

一、念仏を称える人は何ものにも妨げられることのない一筋の道を歩むものである。

一、念仏者は無碍の一道なり。

その理由は何かといえば（どうしてかといえば）、

そのいはれいかんとならば、信（ひたす）ら念仏を信じて称える人には、

心の行者には、天神・地祇も敬（天の神・地の神も敬服し（敬い従い）、）

伏し、魔界・外道も障碍（悪魔・外道（異教徒）も妨げる（邪魔する））することはできない。

となし。罪悪も業報を感ずること（いかなる）罪悪もその報いを感じる（引き起こす）ことはできないし、

とあたはず、諸善もおよぶこと（もろもろの善も（念仏によってもたらされる優れた報いに））

なきゆへなりと云々。（及ぶことがないからである。）

第八条

一、念仏はそれを行ずる（称える）者（念仏者）にとっては、非行（行でなく）・非善（善でない）である。

一、念仏は行者のために非行・非善なり。わがはからひにて行ずる（称える）のではないのだから、

（浄土に往生しようという）自分のはからい（思い）で念仏を行ずるにあらざれば、非行といふ。

念仏者にとって念仏を非行という。

わがはからひにてつくる善にも（功徳を積もうという）自分のはからい（思い）で作る善でもないので、

念仏者にとって念仏を非善という。

あらざれば、非善といふ。ひとへに他力にして自力をはなれたるゆへに、

念仏はひたすら他力（阿弥陀仏の本願の働き）であって、自力（自分の計らい）を離れているので、

念仏者にとって（念仏を称えること）は非行・非善である。

行者のためには非行・非善なりと云々。

第九条

一、念仏を称えているけれども、

一、念仏まふしさふらへども、

躍り上がって喜ぶほどの心が沸き起こらないこと、

踊躍歓喜のこゝろおろそかにさふらふこと、

また急いで極楽浄土へ行きたいという心の起こらないのは、

またいそぎ浄土へまひりたきこゝろのさふらはぬは、

いったいどうしたことでしょうかと、

いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、

おたずねしたところ、

まふしいれてさふらひしかば、

親鸞もそういう疑問を持っているのだが、

親鸞もこの不審ありつるに、

唯円房よ、（あなたも）同じ心であったのか。

唯円房おなじこゝろにてありけり。

よくよく考えてみれば、

よくく案じみれば、

天に踊り地に踊るほどに喜ぶべきことを（喜ぶべきことなのに）、

天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、

（それを）喜ばないのだから、

よろこばぬにて、

いよいよ（かえって）、

いよく

極楽浄土へ往生することは決まっている（間違いない）と思わねばならない。
往生は一定とおもひたまふべきなり。
喜ぶべき心を抑えて喜ばせないのは、
よろこぶべきこゝろをおさへてよろこばざるは、
煩悩のしわざである。
煩悩の所為なり。
ところが阿弥陀仏はすでにそのことをよく知っておられて（見抜いておられて）、
しかるに仏かねてしろしめして、
（私たちを）煩悩にまみれた愚か者と仰られている（呼んでおられる）ことであれば、
煩悩具足の凡夫とおほせられたることなれば、
阿弥陀仏の他力の悲願（本願）は、
このようなわれわれのためにこそ立てられたのだと知られて、
他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、
いよいよ頼もしく思えるのである。
いよ〳〵たのもしくおぼゆるなり。
また極楽浄土へ急いで行きたいという心（気持ち）もなく、
また浄土へいそぎまひりたきこゝろのなくて、
ちょっと病気でもすると、
いさゝか所労のこともあれば、
死んでしまうのでは
死なんずるやらんとこゝろぼそくおぼ
ないかと心細く（不安に）思うことも、
ずるやらんとこゝろぼそくおぼ

ゆることも、煩悩の所為なり。
煩悩のしわざである。
久遠劫よりいまゝで流転せる苦
きわめて遠い昔より今まで流転してきた苦悩の（存在は）古里（故郷）のごとくで捨てがたく、
悩の旧里はすてがたく、いまだ
（反対に・逆に）いま
むまれざる安養の浄土はこひし
だに生まれたことのない安養の浄土（心身ともに安らかな阿弥陀仏の浄土）を恋しいと思わないことは、
からずさふらふこと、まことに
まことにもっていよいよ煩悩
よく〳〵煩悩の興盛にさふらふ
が激しく盛んであるからである。
にこそ。なごりおしくおもへど
（けれども）どんなになごりおしく思っても、
も、娑婆の縁つきて、ちからな
この世の縁がつきて、
どうしようもなくなって死ぬ
くしておはるときに、かの土へ
時には、
阿弥陀仏の浄土へ行くことに
はまひるべきなり。いそぎまひ
（阿弥陀仏は）急いで行きたいとい
う心のない者を、
りたきこゝろなきものを、こと
ことのほか
（特別に）あはれんでくださるのである。
これにてあるからこそ
にあはれみたまふなり。これに
（だからこそ）、
つけてこそ、いよ〳〵大悲大願
いよいよ（いっそう）阿弥陀仏の大悲の本願はたのもしく、

はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ。踊躍歓喜のこゝろもあり、いそぎ浄土へもまひりたくさふらはんには、煩悩のなきやらんとあやしくさふらひなましと云々。

極楽浄土へ往生することは決まっている（確実である）と考えられるのである。

躍り上がって喜ぶほどの心もあり、

急いで極楽浄土へも行きたいというのであれば、

（自分には）煩悩がないのでは

はなかろうかと、かえって疑わしく思われることである。

第十条

一、念仏は凡夫の計らい（自力）がないことをもって阿弥陀仏の計らい（他力）とする。

一、念仏には無義をもて義とす。

（なぜなら阿弥陀の他力念仏は、われわれ凡夫には）称えることも、説くことも、思いはかることもできない（仏智の世界のもの）であるからだと（親鸞上人）は仰った。

不可称不可説不可思議のゆへにとおほせさふらひき。

そもそも思い返せば、親鸞上人が在世の昔（生きておられた頃）、

そもくかの御在生のむかし、おなじく同じ志（願い）を持って、

こゝろざしをして、あゆみを遼関東からはるばる京都まで足を運び、遠の洛陽にはげまし、信をひと信心をひとつにして、つにして、心を当来の報土にか未来には必ず極楽浄土へ往生しようと心で誓い合った人々は、

けしともがらは、同時に御意趣同時（その時）に親鸞上人のお考（お心の中）をお聞きしたけれども、

をうけたまはりしかども、そのその人々といっしょに念仏を称えていらっしゃる老人や若者、

ひとぐにともなひて念仏まふ数知れぬ位に多くいらっしゃる中で、

さるゝ老若、そのかずをしらず

おはしますなかに、上人のおほ親鸞上人の仰ったお考えにはない

異端の考えを、
せにあらざる異義どもを、近来（近頃では多く）
はおほくおほせられあふてさふ（しきりに）談じ合って（語り合って）おられるということを、
らふよし、つたへうけたまはる。伝え聞いている。
いはれなき条々の子細のこと。（それら）根拠のない異説の一つ一つについて仔細（詳しい事情）を語っていきましょう。

第十一条

一、文字一つ知らない（まったく文字を知らない）人たちが念仏を称えているのに対して、

一、一文不通のともがらの念仏まふすにあふて、なんぢは誓願不思議を信じて念仏まふすか、また名号不思議を信ずるかといひおどろかして、ふたつの不思議の子細をも分明にいひひらかずして、ひとのこゝろをまどはすこと、この条かへすぐもこゝろをとゞめて、おもひわくべきことなり。誓願の不思議によりて、やすくたもち、となへやすき名号を案じいだしたまひて、この名字をとなへんも

あなたは阿弥陀仏の誓願（本願）の不思議（な働き）を信じて念仏を称えるのか、それとも阿弥陀仏の名号（南無阿弥陀仏）の不思議（な働き）を信じて念仏を称えるのかと言い驚かして、二つの不思議（誓願の不思議と名号の不思議）（な働き）の意味をはっきりわかるように説明もせず、人の心を惑わす（者がいる）こと、このことはかえすがえす（くれぐれも）心に留めて（留意して、注意して）、阿弥陀仏の誓願（本願）の不思議（な働き）によって、（信心）をたもちやすく、称えやすい名号（南無阿弥陀仏）を考えだして、この名号を称える者を極楽浄土へ迎えとろうとお約束されたのであるから、

のをむかへとらんと御約束あることなれば、まづ弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまひらせて生死をいづべしと信じて、念仏のまふさるゝも、如来の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからのはからひまじはらざるがゆへに、本願に相応して実報土に往生するなり。これは誓願の不思議をむねと信じたてまつれば、名号の不思議も具足して、誓願・名号の不思議ひとつにして、さらにことなるこ

まず、阿弥陀仏の大慈大悲の本願の不思議（な働き）に助けられて（輪廻転生の）迷いの世界から抜け出せる（極楽浄土へ往生できる）と信じて、

念仏を称えることができるのも、

阿弥陀如来（阿弥陀仏）の少しも自らの

はからいで（お心）のおかげであると思えば、

はからい（思慮分別）が混じっていないので、

阿弥陀仏の本願にかなって真実の浄土（極楽

これは阿弥陀

浄土）へ往生するのである。

仏の誓願（本願）の不思議（な働き）がその救いの本であると信じれば、

（自ずから）名号の不思議（な働き）も具わるのであり、

誓願と名号の不思議（な働き）は一つ（同一）であって、

まったく異なることはないのである。

次に自らのはからい（思慮分別）を働かせて、

となきなり。つぎにみづからの

善と悪の二つ

はからひをさしはさみて、善悪

（善）は往生の助けとなり、（悪）は

について、

のふたつにつきて、往生のたす

障（障害）となると、

阿弥陀

けさはり、二様におもふは、誓

二様に（区別して）考えるのは、

仏の誓願（本願）の不思議（な働き）を頼みにせず（信ぜず）、

願の不思議をばたのまずして、

自分の心（意志）で極楽へ往生するための行に励んで、称える念仏（念仏を称えること）をも（念仏は本

わがこころに往生の業をはげみ

来本願の不思議な働きであるのに）自分（自力）で往生するための行としてしまうのである。

てまふすところの念仏をも自行

このような人は（誓願の不思議な働きを信じないのだから）

になすなり。このひとは名号の

名号（南無阿弥陀仏）の不思議な働きをもまた信じていないのである。

不思議をもまた信ぜざるなり。

（しかし）名号の不思議な働きを信ぜずとも、

辺地・懈慢・疑城胎宮といった方便化土（阿弥陀仏

信ぜざれども、辺地・懈慢・疑

が自力に執われている行者に思い描かせておられる浄土）に往生するが、

阿弥陀仏の必ず極楽浄土に往

城胎宮にも往生して、果遂の願

生させようという願いによって、

ついに真実の浄土に生まれることになるのは、

のゆへに、つひに報土に生ずる

名号（南無阿弥陀仏）の不思議（な働き）の力である。

は、名号不思議のちからなり。

名号（南無阿弥陀仏）の不思議な働きはすなわち、誓願の不思議な働きでもあるのだから、

これすなはち、誓願不思議のゆへなれば、たゞひとつなるべし。

名号の不思議な働きと誓願の不思議な働きは、ただ一つ（同一）である。

第十二条

一、経釈をよみ学せざるともがら、往生不定のよしのこと。この条すこぶる不足言の義といひつべし。他力真実のむねをあかせるもろ〳〵の正教は、本願を信じ念仏をまふさば仏になる、そのほかなにの学問かは往生の要なるべきや。まことに、このことわりにまよへらんひとは、いかにも〳〵学問して、本願のむねをしるべきなり。経釈をよみ学すといへども、聖教の本意

一、経典や注釈書を読んで学習しない者達は、

極楽浄土に往生できるかどうかは定まっていない（わからない）ということ。

これはまったく論ずるまでもない誤った考えと言わなければならない。

絶対他力（阿弥陀仏の本願力）の真実の内容を明らかにしている様々な

聖教（仏の教えを説いた経典）は、

阿弥陀仏の本願を信じて念仏すれば仏になる（と説いている）、

その他に何の学問が極楽浄土に往生するために必要なのだろうか。

本当に、

この道理を

知らずに迷っている人は、

どのようにも（どこまでも）学問して、

本願の内容（意味）

経典や注釈書を読み学習したを知るべきである。

としても、

聖教（仏の教えを説いた経典）の本当

の意味を理解していないことは、はなはだ気の毒なことである。

をこゝろえざる条、もとも不便のことなり。一文不通にして、経釈文字一つ知らない（まったく文字を知らない）人で、経典や注釈書の筋道さえも知らない人でも、のゆくぢもしらざらんひとの、と称えやすい名号（南無阿弥陀仏）であるから、なへやすからんための名号におは易行というのである。しますゆへに、易行といふ。学問（これに対して）（これを）難行学問を本旨とする（として自力で悟りを開く）のは聖道門であり、をむねとするは聖道門なり、難行と名づける。誤った方向へ学問して名誉や富に執着する人が、となづく。あやまて学問して名聞・次の輪廻転生利養のおもひに住するひと、順次（生まれ変わり）で極楽浄土へ往生できるかどうか疑わしいことだという（教えた）（聖人・親鸞聖人の）の往生いかゞあらんずらんといふ確かな（証拠の）文書もある。その頃、証文もさふらふべきや。当時、専（もっぱ）ら念仏を称えることに専念する）専修念仏の人と（修行して自力で悟りを開こうとする）聖道門の人が、修念仏のひとゝ聖道門のひと、法教義について論争を企てて（もくろんで）、論をくはだてゝ、わが宗こそすぐ自分の宗旨こそすぐれている、れたれ、ひとの宗はおとりな人（他）の宗旨は劣っていると主張するうちに、

りといふほどに、法敵もいでき（仏法に敵対する者もあらわれ、）たり、謗法もおこる。（仏法を謗る（そしる）ことも起きるのである。）これしかしながら、（これはしかしながら、）みずからわが法を破（自らが自分の信じる仏法を破り謗るということになるのではあるまいか。）謗するにあらずや。たとひ諸門（たとえ諸宗派（の人々）がこぞって、）こぞりて、念仏はかひなきひと（「念仏はつまらない人のためのもので、その（念仏の）宗派は浅薄で低俗である」と言ったとしても、）のためなりその宗あさしいやしといふとも、（少しも争わず、）さらにあらそはずして、（「自分たちのような能力の劣った平凡な人間で、）われらがごとく下根の凡夫、（文字一つ知らない者が、）一文不通のもの、（阿弥陀仏の本願を）信ずれば（ただ信じれば救われるという、）たすかるよし、（その教えを聞いて信じているのだから、）うけたまはりて信じさふらへば、（すぐれた能力をお持ちの（自力で））さらに上根のひとのためにはいやしくとも、（悟りが開けると考えている）方々には低俗な教えであっても、）われらがためには最上の法にて（私たちにとっては最上の仏法なのです。）

たとえ他の（念仏以外の）教えがどんなにすぐれていたとしても、
ます。たとひ自余の教法すぐれたりとも、
私たち自身にとっては能力の及ばないことでありま
みづからがためには器量およばざればつとめがたし。
すから、その修行を勤めることはできません（不可能です）。
われもひとも（すべての人が）、生死（の迷い）を離れて悟りを開くことが諸仏の
われもひとも生死をはなれんことこそ諸仏の御本意にておはしませば、
御本意（真意）であるのですから、
私たちの念仏をどうか妨げないでいただきたい」と言
御さまたげあるべからずとて、
にくらしい態度を取らなければ、
って、
にくひ気せずば、たれのひとかありて、あだをなすべきや。
だれが敵対してくることがあろうか。
かつは諍論のところにはもろ〳〵の煩悩おこる、
それにまた、論争するとそこに諸々の（多々）煩悩が生まれるので、
智者遠離すべきよしの証文さふらふにこそ。
智恵のある者は（論争から）遠ざかるのがよいという確かな教えの文章もある。
故聖人のおほせには、この法をば信ずる衆生もあり、
亡き親鸞聖人が仰られるには、
「この念仏の教えを信じる者もいれば、

誘る者もいるだろうと、
そしる衆生もあるべしと、仏（釈尊（釈迦仏））
が説いておられることであれば、
きおかせたまひたることとなれば、
私はすでに（念仏の教えが真実であると）信じているのです。
われはすでに信じたてまつる。
また、
また、ひとありてそしるにて、（それを誘る人があるからこそ、）
釈尊（釈迦仏）の教えは真実であったと、
仏説まことなりけりと、しられ（知られるのです。）
よって極楽浄土へ往生することはいよいよ間違いないと思ってください。
さふらふ。しかれば往生はいよ
〈一定とおもひたまふべきな
もし誘る人がいなかったならば、
り。あやまてそしるひとのさふ
どうして信じる人はいるのに、
らはざらんにこそ、いかに信ず
誘る人はいないのだろうと（不思議に）
るひとはあれども、そしるひと
思われることでしょう。
のなきやらんともおぼえさふら
このように言ったからといって、
ひぬべけれ。かくまふせばとて、
必ず人に誘られようというわけではありません。
かならずひとにそしられんとに

はあらず、仏のかねて信謗ともに
釈尊（釈迦仏）はかねてより信じる者と謗る者がともにあることをお示しになって、
あるべきむねをしろしめして、ひとのうたがひをあらせじと、ときおかせたまふことをまふすなりとこそさふらひしか。いまの世には、学文してひとのそしりをやめ、ひとへに論議問答むねとせんと、かまへられさふらふにや。学問せば、いよ〳〵如来の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかゞなんど、あやぶまんひとにも、本願には善悪浄穢なきおもむきをも
（たとえ謗る者があったとしても）人に疑いを起こさせないようにと、お説きくださっていることをいうのです」と仰られた。
（しかし）この頃は、学問することによって他人からの謗りをやめさせ、もっぱら論議・問答を主にしよう（に力を注ごう）と、身構えておられるのであろうか。
学問すれば、いよいよ（深く）阿弥陀如来のご本意（本願の本当の心）を知り、阿弥陀如来（仏）の悲願がいかに広大であるかをも知って、こんな賤しい身で極楽に往生することができるであろうかなど、危ぶんでいる（心配している）人にも、阿弥陀仏の本願には善人と悪人、浄らかな人と穢れた人の区別はなく、すべての人を平等にお救いになるということを

説いて聞かせるということであってこそ、
説ききかせられさふらはばこそ、
学問した甲斐もあるというものである。
学生のかひにてもさふらはめ。た
（ところが）たまたま何のはからいもなく、
まく、なにごころもなく、本願に
念仏を称える人に対しても、
相応して念仏するひとをも、学問
（救われる）などといいおどすならば、
してこそなんどいひおどさるこ
（その人は）仏法を妨げる悪魔であり、
と、法の魔障なり、仏の怨敵なり。
（その人は）自ら他力の信心に欠けているのみならず、
みづから他力の信心かくるのみな
誤って他人を迷わすことになるのだ。
らず、あやまて他をまよはさんと
慎み畏れねばならない、
す。つゝしんでおそるべし、先師
のお心（教え）に背くことを。
の御こゝろにそむくことを。かね
べきである、
てあはれむべし、弥陀の本願にあ
阿弥陀仏の本願に反することを。
らざることを。

本願の心にかなって
学問してこそ
仏の（にたてつく）怨敵である。
亡き親鸞聖人
さらに悲しむ

前頁
次頁
目次
非表示

第十三条

一、阿弥陀仏の本願には不思議な力があるからといって、弥陀の本願不思議におはしませばとて、悪を恐れないのは、悪をおそれざるは、

つまり本願に甘える「本願ぼこり」であり、また本願ぼこりとて、

（そのような人は）極楽に往生することはできないということ。往生かな

これは、ふべからずといふこと。

阿弥陀仏の本願を疑うことであり、この条、

善悪が宿業（前世を含む過去の自分の行為による報い）であることを心得ていない（知らない）からである。本願をうたがふ、善悪の宿業をこゝろえざるなり。

善い心が起こるのも、よきこゝろ

宿善（前世を含む過去の善行の報い）によって引き起このおこるも、宿善のもよほす

悪事を（しようと）思わされる（思う心が起こる）のも、されるのである。ゆへなり。悪事のおもはれせらる、も、悪業のはからふゆへなり。

悪業（前世を含む過去の悪行の報い）がそうさせるのである。

亡き親鸞聖人がおっしゃるには、故聖人のおほせには、

うさぎの毛・羊の毛の先についているちりばかりの（小さな）罪も、卯毛・羊毛のさきにいるちりばかりも、

（前世を含む過去に）作った罪の、つくるつみの、

宿業（前世を含む過去の自分の行為による報い）に宿業にあらずと

よらないということはないと知るべきであると仰られた。

いふことなしとしるべしとさふらひき。またあるとき、（またあるとき、）唯円房はわがいふことをば信ずるかと、おほせのさふらひしあひだ、（仰ったので、）さんさふらふと申し（「さようでございます（はい信じます）」と申し上げたところ、）さふらひしかば、さらばいはん（「ならば、（私の）いうことに決して背かないか」と、）ことたがふまじきかと、かさねておほせのさふらひしあひだ、つゝしんで領状まふし（つつしんでそれをご承知申し上げたところ、）てさふらひしかば、たとへば、（「それではまず、人を千人殺してくれないだろうか、）ひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべしとおほせさふらひしとき、おほせ（重ねて仰られたので、）（「唯円房は私の言うことを信じるか」と、）

（そうすれば極楽浄土に往生することは間違いない」と仰ったので、）

（聖人の）お言葉ではありますが、

にてはさふらへども、一人も

ただの一人であっても

この私の力量では殺せそうに思えません」と申し上げたところ、

この身の器量にてはころしつべしともおぼえずさふらふとまふしてさふらひしかば、さてはいかに親鸞がいふことをたがふまじきとはいふぞと。これにてしるべし、なにごともこゝろにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども一人にてもかなひぬべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこゝろのよくてころさぬにはあ

ことに背きませんといったのだ」と仰った。

「ならばどうして親鸞の言う

「これでわかるだろう、

なにごとも思い通りになることならば、

極楽に往生するために千人殺せと言われれば、

けれども一人ですら殺せる業縁（苦楽の果報を招く因となる前世を含む過去の善悪の行為）がないから殺害しないのである。

すぐに殺すだろう。

自分の心が善くて殺さないのではない。

また逆に（一人も）殺害するまいと思っても百人・千人殺すこともあるだろう」と

らず。また害せじとおもふとも

仰ったのは、

百人・千人をころすこともあるべしとおほせのさふらひしは、

私たちが自分の心が善いのを（極楽浄土に往生するために）善いと思い、

われらがこゝろのよきをばよしとおもひ、

自分の心が悪いのを（極楽浄土に往生するために）悪いと思って、

悪しきことをば悪しとおもひて、

阿弥陀仏の本願の不思議によって救われるのだということを

知らないことを、

願の不思議にてたすけたまふといふことをしらざることを、

仰っているのである。

おほせのさふらひしなり。

かつて邪な考えに陥った人がおり、

そのかみ邪見におちたるひとあて、

「悪を犯したものを救おうというのが阿弥陀仏の本願であるので、

悪をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、

わざと好んで悪事を犯し極楽へ往生する業因（たね）としなければ

わざとこのみて悪をつくりて往生の業とすべきよし

ならない」といって、

をいひて、やう〳〵にあしざまいろいろと悪事を働いているという噂が聞こえてきた時、なることのきこへさふらひしとき、御消息に、お手紙に、くすりあればとて毒をこのむべからずとあそ「薬があるからといって、好んで毒を飲むべきではない」とお書きになったのは、ばされてさふらふは、かの邪執そのような邪執（邪な考えに執われること）をやめさせるためであった。をやめんがためなり。まったくもって、悪は極楽に往生する妨げとなるというわけではない。は往生のさはりたるべしとにはあらず。持戒・持律にてのみ本戒律（仏教の戒めと仏教徒としての規律）を守ることでのみ阿弥陀仏の願を信じることができるというのであれば、願を信ずべくは、われらいかでどうして生死の迷いの世界を離れることができようかと（仰った）。か生死をはなるべきやと。かゝ阿弥陀仏の本願に出会ってこそ、このようなるあさましき身も、本願にあひあさましい罪悪の身であっても、本当に阿弥陀仏の本願の尊さを誇るたてまつりてこそ、げにほこら我が身に悪をことができるのである。れさふらへ。されば、だからといって、とて、身に

犯す業縁がそなわっていないのならば、
そなへざらん悪業は、よもつく
ないだろうが（実際には悪の業縁にまみれた身であるから人は現世で悪行を犯すのである）。また、
まさか（悪行を）犯すことも
られさふらはじものを。また、
海や川に網を引き、
うみかわにあみをひき、つりを
釣りをして、
して、世をわたるものも、野や
生計を立てる者も、
り、
鳥を捕って、
まにしゝをかり、とりをとりて、
商売をし、
命をつなぐ（生活している）人々も、
いのちをつぐともがらも、あき
田畑を耕して生活する人も（商人も農民も）、
なひをし、田畠をつくりてすぐ
野山で獣を狩
（前世を含む過去の業縁を抱えていることは）まったく同じであると（仰った）。
るひとも、ただおなじことなり
そうせざるを得ない業縁がはたらけば、
と。さるべき業縁のもよほさば、
どんな悪行でもするだろうと、
いかなるふるまひもすべしとこ
親鸞聖人は仰ったのに、
そ、聖人はおほせさふらひしに、
この頃は自分こそが念仏して極楽往生を願う者であるふりをして、
善人だけが念仏を称え
当時は後世者ぶりして、よから
るように（言い）、
んものばかり念仏まふすべきや

うに、あるひは道場にわりぶみ（あるいは念仏道場に張り紙をして、）をして、なむ〳〵のことしたらん（これこれのことをした者は、）ものをば、道場へいるべからずなんど、いふこと、ひとへに賢善（念仏道場に入ってはいけないなどということ、）（まったく表面上はいかにも賢者善人がひたすら）（内心には偽り）精進の相をほかにしめして、うちには虚仮をいだけるものか。願に（本願を誇って）ほこりてつくらんつみも、宿業の（宿業（前世を含む過去の）作る罪（極楽へ往生する業因とするためわざと犯した悪事）も、）もよほすゆへなり。されば（自分の行為よる報い）によりもたらされたものなのである。）よきこ（善いことも悪いことも業報（宿業の報い））ともあしきことも業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまひ（であると受け取って、）らすればこそ、他力にてはさふらへ。唯信抄にも、弥陀いかばかりのちからましますとしりてか、罪（ただひたすらに阿弥陀仏の本願をおたのみすることこそ、）（他力に生かされるということである。）（唯信抄にも、）（阿弥陀仏にいったいどれくらいの力があると知って、）

自分のように罪深い身であれば、救われることは難しいと思うのであろうか（罪深いこの身が救われ難いと思うのは、いったい阿弥陀仏にどれほどの力があると知った上でのことであろうか）。

業のみなれば、すくはれがたしと

おもふべきとさふらふぞかし。本願にほこるこゝろのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにてさふらへ。

阿弥陀仏の本願に甘える心があればこそ、他力を信じる信心も確かに定まることである。

おほよそ、悪業煩悩を断じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にほこるおもひもなくてよかるべきに、煩悩を断じなば、すなはち仏になり、仏のために

この身の罪悪と煩悩を断ち切った後、阿弥陀仏の本願を信じるというのならば、本願に甘える心もなくてよいだろうが、煩悩を断ち切ったならば、すぐに仏になるのであり、仏になった者には五劫思惟の願（罪深い人々を救うため五劫という長い時間をかけて深く考え念仏を選び取られた阿弥陀仏の本願）は、まったく無意味になってしまうだろう。

は五劫思惟の願、その詮なくやましまさん。本願ぼこりといましめらるゝひとぐも、煩悩不

本願ぼこり（阿弥陀仏の本願に甘える心）を戒められる人々にしても、煩悩や穢れを身につけ

ておられるようである。

浄具足せられてこそさふらうげなれ。（そうであるなら）それは本願ぼこり（阿弥陀仏の本願に甘える心）ということではあるまいか。それは願にほこらるゝにあらずや。どんな悪を本願ぼこりというのであろうか、いかなる悪を本願ぼこりといふ、どんな悪を本願誇りでないというのであろうか。いかなる悪かほこ（本願ぼこり）らぬにてさふらふべきぞや。（本願ぼこりを問題にするのは）かえって幼稚で浅はかな考えではないだろうか。かへりてこゝろをさなきことか。

第十四条

一、一回の念仏で八十億劫という長い時間苦しみ迷う重罪を消滅させることができると信じるようにということ。

一、一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしといふこと。

これは、

この条は、十悪・五逆（ありとあらゆる悪行）の罪人が、日頃は念仏を称えていなくても、日ごろ念仏をまふさずして、命終の命が終わろうとする時に、はじめて善き導きの教えによって、ときはじめて善知識のをしへにて、念仏を一回称えると八十億劫の罪が消滅し、一念まふせば八十億劫のつみを念仏を十回称えると、その十倍（八百億劫）の重罪を消滅させて極楽浄土に往生する滅し、十念まふせば十八十億劫ことができるという。の重罪を滅して往生すといへり。これは十悪・五逆の罪の重さをわからせるために、これは十悪・五逆の軽重をしらせんがために、一念・十念といへるか。一回の念仏・十回の念仏と言ったのだろう。（そのように（つまり念仏には）罪を消滅させる利益があることをいうのである。）滅罪の利益なり。いま罪を消滅させるために念仏を称えるなどということは）いまだに私たちが信じる他力の信心には、はるだわれらが信ずるところにおよ

かに及ばない。

ばず。そのゆへは、

その理由は、

にてらされまゐらするゆへに、

よって、

一念発起するとき金剛の信心を

一度念仏しようと思い立つ心が起こる時、金剛石（ダイヤモンド）の如き固い信心をいただくのだから、

たまはりぬれば、すでに定聚の

すでに極楽浄土に生まれて仏になる身分に定められて、

くらゐにおさめしめたまひて、

命が終われば、

命終すれば、もろ〳〵の煩悩悪

もろもろの煩悩や悪障（悪のさわり）が転じて（転悪成善）、

障を転じて、無生忍をさとらし

もはや生じることも滅することもない絶対無限の無上の悟り

めたまふなり。この悲願ましま

をひらかせていただくのである。

この大悲の本願がなければ、

さずば、か〻るあさましき罪人、

このような（私たちのような）あさましい罪人が、

いかでか生死を解脱すべきとお

どうして生死の迷いから自由になれるだろうかと思い、

もひて、一生のあひだまふす

一生の間称える念仏は、

ところの念仏は、みなことゞく

すべてことごとく如来（阿弥陀仏）の大悲の

く如来大悲の恩を報じ徳を謝す

恩に報い、その徳に感謝するためのものと思うべきである。

阿弥陀仏の光明に照らされることに

前頁

次頁

目次

非表示

とおもふべきなり。念仏まふさ
（念仏を称えるごとに、）
んごとに、つみをほろぼさんと
（念仏の力によって）罪を消滅させていこうと信じることは、
信ぜんは、すでにわれとつみを
すでに自分の力で罪を消して極楽浄土に往生しようと励むことである。
けして往生せんとはげむにてこ
そさふらふなれ。もししからば、
（もしそうであるなら、）
一生のあひだおもひとおもふこ
（一生の（生きている）間に、あれこれ思いわずらうことは、）
と、みな生死のきづなにあらざ
（すべて生死のきずな（迷いの世界に自分を縛りつけるきずな）でないものはないのだから、）
ることなければ、いのちつきん
（命がつきるまで怠ることなく念仏を称え続けることで極楽浄土に往生できるということになる。）
まで念仏退転せずして往生すべ
（しかし、私たちの行為は業報（前世を含む過去の行為の報い）によって限定される（もたらされる）ものであれば、どんな不思議な（思いもよらない）ことが起こるかもしれないし、）
し。たゞし業報かぎりあること
なれば、いかなる不思議のこと
（また病気の悩みや苦しみに責められ、）
にもあひ、また病悩苦痛をせめ
（静かに落ち着いた心を保てないまま命が終わるかもしれず、）
て、正念に住せずしてをはらん、

（そうなれば）念仏を称えることは難しい。
念仏まふすことかたし。そのあ
（ならば）その（念仏を
ひだのつみをば、いかゞして滅
称えなかった）間の罪は、
どのようにして消滅させるというのであろうか。
すべきや。つみ消えざれば、往
（もし）罪が消えなければ、
極楽浄土に往生することはできないのだろうか。
生はかなふべからざるか。摂取
（しかし、）
摂取不捨（すべての者を救い取って捨てない）という阿弥陀仏の本願にお任せするならば、
不捨の願をたのみたてまつらば、
どんな思いもよらないことに遭遇して罪業を犯し、
いかなる不思議ありて罪業をお
念仏を称えることなく命が終わったとしても、
かし、念仏まふさずしてをはる
すぐに極楽浄土に往生することができるのである。
とも、すみやかに往生をとぐべ
また、（臨終に）念仏が唱えられるとしても、
し。また念仏のまふされんも、
（それは罪を消すための念仏ではなく）今まさに真実のさとりを開こうとする時が近づくにつれ、
たゞいまさとりをひらかんずる
期のちかづくにしたがひても、
そのご恩に報謝する
いよいよ阿弥陀仏の本願をたのみ、
いよ〳〵弥陀をたのみ、御恩を
念仏でなければならない。
報じたてまつるにてこそさふら

念仏によって罪を消滅させて極楽浄土に往生しようと思うのは自力を頼む心であり、

はめ。つみを滅せんとおもはんは

自力のこゝろにして、臨終正念と

それが臨終正念（臨終において念仏を称えて極楽浄土に往生すること）しようと祈る人の本心であるから、

いのるひとの本意なれば、他力の

そのような人には他力の信心は欠けているのである。

信心なきにてさふらふなり。

前頁

次頁

目次

非表示

第十五条

一、煩悩具足の身をもて、すでにさとりをひらくといふこと。

一、煩悩を具え持った凡夫の身のままで、すでに（極楽浄土に往生する前に）悟りを開くということ（現世で悟りを開くということ）。

この条、もてのほかのことにさふらふ。即身成仏は真言秘教の本意、三密行業の証果なり。六根清浄はまた法花一乗の所説、四安楽の行の感徳なり。これみな難行上根のつとめ、観念成就のさとりなり。来生の開覚は他力浄土の宗旨、信心決定の道なるがゆへなり。これまた易行下根のつとめ、不簡善悪の法なり。

これは、とんでもないことである。

即身成仏（人間が現世の肉体のままで仏になること）は真言密教の根本教義であり、三密加持の修行によって得られる悟りである。

六根清浄はまた一乗の教えを説く法華経の説であり、それは四安楽の修行により得られる功徳である。

これら（三密行業と四安楽の修行）はいずれも難行で、能力の優れたものが修める行であり、真理を心に集中して観察してこそ得られる悟りである。

（これらとは逆に）来世において悟り（覚り）を開くのが他力を頼む浄土宗の宗旨である。（それは）阿弥陀仏の本願を信じるとき、ただちに極楽浄土に生まれて悟りを開くことが決定する道だからである。

（しかも）これはまた易行の教えで、能力の劣った者であっても務めることができ、善人と悪人を差別しない教えである。

そもそも、現世において、
おほよそ今生においては、煩悩（煩悩や悪障（悪のさわり・罪悪）を断つことは、極めて難しいので、
悪障を断ぜんこと、きはめてありがたきあひだ、真言・法花（真言や法華の教えを修行した聖僧でさえ、
行ずる浄侶、なほもて順次生（やはり次の世に極楽浄土に生まれて悟りを開くことを祈る
さとりをいのる。いかにいはん（なおさら、
や、戒行・慧解ともになしといへども、修行もできず、智恵も得ていないこの身であっても、
弥陀の願船に乗じて生（阿弥陀仏の本願の船に乗って迷いの生死の苦海（苦しみの絶えない人間界）
死の苦海をわたり、報土のきし（を渡り、極楽浄土の岸に渡り着くならば、
につきぬるものならば、煩悩の（煩悩の黒雲はすぐに消
黒雲はやくはれ、法性の覚月す（えて晴れ渡り、法性（真如・永久不変の真理）の悟りの月が
みやかにあらはれて、尽十方の（ただちに現れ出て、何ものにも遮られず十方世界
無碍の光明に一味にして、一切（をすみずみまで照らす阿弥陀仏の智恵の光明と一つになって、一切の衆生
の衆生を利益せんときにこそ、（生きとし生けるもの）を救い取ろうとする時こそ、

悟りを開いたというのである。

さとりにてはさふらへ。この身（この身のままで（現世で）悟りを開くという人は、）をもてさとりをひらくとさふらふなるひとは、釈尊（釈迦仏）のように、救いとる人たちに応じて様々に姿を変えて現れ、）のごとく種々の応化の身をも現じ、三十二相・八十（顕著な三十二の優れた身体的特質と付随的ではあるが八十の微細な尊い身体的特徴を具えて、）随形好をも具足して、説法利益（説法して人々を救うというのであろうか。）さふらふにや。これをこそ今生に（これ（生きとし生けるものを救う利他の働きができること）でこそ現世で（この身のままで）悟りを開く本旨というべきであろう。）さとりをひらく本とはまふしさふらへ。和讃にいはく、（親鸞聖人の「高僧和讃」の中に、）金剛堅固の（「金剛堅固の信心の、）信心の、さだまるときをまちえて（さだまるときをまちえてぞ、）ぞ、弥陀の心光摂護して、（弥陀の心光摂護して、）ながく生死をへだてけるとさふらへば、（ながく生死をへだてける」とあるのは、）信心の定まるときに、ひとたび摂（一度阿弥陀仏の光明の中に救い取ら信心が定まる時に、）取してすてたまはざれば、六道に（六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）れれば、二度と捨てられることがないから、）

を輪廻する（生死を繰り返す）ことはない。

輪廻すべからず。しかれば、なが く生死をばへだてさふらふぞかし。かくのごとくしるを、さとるとはいひまぎらかすべきや。

（どうして）悟ると言い紛らして（ごまかして）よいものだろうか。

（本当に）衰れで気の毒なことである。

あはれにさふらふをや。浄土真宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならひさふらふぞとこそ、故聖人のおほせにはさふらひしか。

は、現世において阿弥陀仏の本願を信じ、

土で悟りを開くと（法然上人より）習った（教えていただいた）と、

亡き親鸞聖人は仰られた。

だから、

永遠に

このように理解することを、

浄土真宗（の教え）において

来世に極楽浄

第十六条

一、信心の行者、自然にはらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあひて口論をもしては、かならず廻心すべしといふこと。この条、断悪修善のこゝちか。一向専修のひとにおいては、廻心といふこと、たゞひとたびあるべし。その廻心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の知恵をたまはりて、日ごろのこゝろにては往生かなふべからずとおもひて、

一、阿弥陀仏の本願を信じ念仏を称える者は、ふと腹をたて、悪事を犯したり、同じく阿弥陀仏の本願を信じ念仏を称える仲間同士で口論した時は、かならず廻心（改心・心を改め正しい道に入ること）すべきであるということ。これは、悪を断ち善を修めることで極楽浄土へ往生しようという気持ちであろうか。ひたすら念仏だけを称える人においては、廻心（改心）ということは、生涯でただ一度あることです。その廻心（改心）とは、常日頃は阿弥陀仏の本願他力を本旨とする浄土真宗の教えを知らない人が、（浄土真宗の教えによって）阿弥陀仏の知恵をいただいて、常日頃の（自力の）心では極楽浄土に往生することはできないと思って、

もとの心（自力の心）をひるがえして、
もとのこゝろをひきかへて、本願をたのみまひらするをこそ、
阿弥陀仏の本願におまかせすること（本願他力を信じること）こそ、
廻心（改心）というのである。
廻心とはまふしさふらへ。一切の事に、
（日常生活の）すべての事に、
朝夕に廻心（改心）して（日常絶え間なく廻心して）、
あしたゆふべに廻心して、往生をとげさふらうべくば、
はじめて極楽浄土に往生をとげることができるというのであれば、
人の命は、
ひとのいのちは、いづるいきいるほどをまたずしてをはることなれば、
出る息が入る間を待たずに終わるほどはかないものであるから、
廻心（改心）もせず、柔和な心・耐え忍ぶ心にならないうちに、
廻心もせず柔和・忍辱のおもひにも住せざらんさきに、いのちつきば、
命が尽きたならば、
すべての人を救い取って捨てないという阿弥陀仏の誓願はなんの役にも立たないことになってしまうだろう。
摂取不捨の誓願はむなしくならせおはしますべきにや。
口では「阿弥陀仏の本願の力におまかせする（本願の力を信じる）」と言いながら、
くちには願力をたのみたてまつるといひて、こ

心では「悪人を助けようという阿弥陀仏の本願が、
ゝろにはさこそ悪人をたすけん
いかに不思議（な力を持つもの）であったといっても、
といふ願、不思議にましますと
やはり、善人こそを、
いふとも、さすがよからんもの
をこそ、たすけたまはんずれと
まずお助けになるだろ」と思うために、
おもふほどに、願力をうたがひ、
阿弥陀仏の本願の力を疑い、
他力をたのみまゐらするこゝろ
他力におまかせする（他力を信じる）心が欠けて、
かけて、辺地の生をうけんこと、
極楽の辺地（極楽浄土の辺界の地）に生まれ変わること、
もともなげきおもひたまふべき
（これは）最も嘆かわしいことと思い知らねばならない。
ことなり。信心定まりなば、往
（一度）信心が定まったならば、
生は弥陀にはからはれまひらせ
浄土へ往生するのは、阿弥陀仏のおはからい（他力のはからい）によることであれば、
てすることなれば、わがはから
わがはからい（自力のはからい）で
ひなるべからず。わろからんに
あってはならない。
つけてもいよ〳〵願力をあをぎ
わが身の悪さがわかってくるにつけても、
いよいよ阿弥陀仏の本願の力を仰ぐようになれば、

まひらせば、自然（自然の道理によって、）のことはりにて、柔和・忍辱（柔和で耐え忍ぶこころも出てくるだろう。）のこころもいでくべし。すべてよろづのことにつけて（すべて何事につけても、）、往生にはかしこきおもひを具（極楽に往生するには小賢しい考えは持たず、）せずして、たゞほれ〴〵と弥陀の御恩の深重なること（ただほれぼれと阿弥陀仏のご恩の深く重いことを、）、つねはおもひいだしまひらすべし（常に思い出すべきである。）。しかれば（そうすれば、）、念仏もまふされさふらふ（おのずと念仏を称えられるものだ（念仏が口に出るものだ）。）。これ自然なり（これが自然（・じねん「人為によらず存在する事象」）である。）。わがはからはざるを（自力のはからいのないのを、）、自然とまふすなり（というのである。）。これすなはち他力にてまします（これがすなわち他力（阿弥陀仏の本願力）である。）。しかるを（ところが、）、自然（自然というものが、）といふことの別にあるやうに（これとは別にあるように、）、われものしりがほにいふひとのさふ（物知り顔でいう人がいると聞いている。）

らふよしうけたまはる、あさまし
くさふらふ。

あさましい限りである。

第十七条

一、極楽浄土の辺地（辺界の地）に往生する人は、

一、辺地往生をとぐるひと、つひには地獄におつべしといふこと。

ついには（最後には）地獄に落ちるということ。

この条、なにの証文にみへさふらふぞや。

これは、いったいどの経典や注釈書に書かれているというのだろうか。

学生だつるひとのなかに、いひいださるゝことにてさふらふなるこそ、あさましくさふらへ。

（これが）学者ぶった人の中から、言い出されたということは、あきれかえったことである。

経論正教をば、いかやうにみなされてさふらふらん。

どのように読んでおられるのであろうか。

信心かけたる行者は、願をうたがふによりて、辺地に生じてうたがひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひら

信心の欠けた念仏者は、阿弥陀仏の本願を疑うので、極楽の辺地（辺界の地）に生まれて、そこで阿弥陀仏の本願を疑う罪を償った後、（報土）真実の極楽浄土に生まれて悟りを開くと承って（聞いて）いる。

くとこそ、うけたまはりさふらへ。信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすゝめいれられさふらふを、つひにむなしくなるべしとさふらふなるこそ、如来に虚妄をまふしつけまひらせられさふらふなれ。

真実の信心を得た念仏者は少ないので、

（阿弥陀如来は、）まず、方便化土（辺地）に往生することを多く勧めてくださるが、

それを、最後にはむなしく地獄に落ちることになるだろうというのでは、

阿弥陀如来が

嘘を言われたことになってしまうだろう。

第十八条

一、仏事のために、寺や僧侶に寄進する布施の多い少ない

一、仏法のかたに、施入物の多少にしたがひて大小仏になるべしといふこと。これは、この条、不可説なり〳〵、比興のことなり。まづ仏に大小の分量をさだめんこと、あるべからずさふらふか。

まず、仏に大きいとか小さいとかの分量を定めることは、あるはずのないことであろう（有り得ぬことだろう）。

言語道断であり、不都合なことである。

かの安養浄土（極楽浄土）の教主である阿弥陀仏のお身体の大きさについて（経典で）説かれているのも、かの安養浄土の教主の御身量をそれは衆生を救うために形あ説かれてさふらふも、それは方（極楽浄土に往生して）永遠るものとして現れ出た仮の姿である。便報身のかたちなり。法性のさ不変の真理である（法性真如）の悟りを開いて、長いとか短いとか、四角とか丸いとかの形をとりをひらひて、長短方円のか離れ、たちにもあらず、青黄赤白黒のい青・黄・赤・白・黒といった色を離れれば、何を基準に仏身の大小を決めることができろをもはなれなば、なにをもてか

ようか。

大小をさだむべきや。念仏まふすに、化仏をみたてまつるといふことのさふらふなるこそ、大念には大仏をみ、小念には小仏をみるといへるか。もしこのことわりなんどにばし、ひきかけられさふらふやらん。かつはまた檀波羅蜜の行ともいひつべし、いかにたからものを仏前にもなげ、師匠にほどこすとも、信心かけなばその詮なし。一紙半銭も仏法のかたにいれずとも、他力にこゝろをなげて、信心ふか

念仏を称えれば、

化仏（仮に姿を現した仏・応化身の仏）の姿を見たてまつる（拝見する）ことがあるということが説かれているのは、

選択集に「大きな声で念仏すれば大きな仏を見て、小さな声で念仏すれば小さな仏を見る」とあるのを言ったものであろうか。

もしかしたら、この説などに、

わざとこじつけて（布施の多そしてまた、（布施をすることい少ないで、大きい仏、小さい仏になると）言ったものだろう。

と）は、檀波羅蜜の行（布施の行）と言ってもいいだろう。

いかに財宝を仏前に供え、

師匠（僧侶）に施しても、

信心が欠けて

（たとえ）紙一枚、銭半銭

いるなら、なんの意味もない。

阿弥陀

すらも仏事の布施に寄進せずとも、

信心が深ければ、

仏の本願他力に心を投げ入れて、

くば、それこそ願の本意にてさふらはめ。すべて仏法にことをよせて、世間の欲心もあるゆへに、同朋をいひをどさるゝにや。

（それこそが、阿弥陀仏の本願のお心にかなうというもであろう。）
（布施の多い少ないを論じる人々は）すべて仏の教えにかこつけて
（本質をごまかし）、世俗の欲望もあるので、
（そのようなことを言って）念仏を称える仲間を言い驚かすのである。

結び（結文）

右条々は、みなもて信心のことなるより、ことおこりさふらふか。

右に（これまで）述べてきたことは、すべて親鸞聖人の信心と異なるものであったことから、起きたものであろうか。

故聖人の御ものがたりに、法然聖人の御とき、御弟子そのかずおはしけるなかに、おなじく御信心のひともすくなくおはしけるにこそ、親鸞御同朋の御なかにして御相論のことさふらひけり。そのゆへは、善信が信心も聖人の御信心も一つなりとおほせのさふらひければ、勢観房・念仏房などというお弟子仲間の方々が、房・念仏房なんどまふす御同朋

亡き親鸞聖人からお聞きしたお話に、

法然上人がご在世の頃（生きておられた時）、

たくさんおられた弟子の中で、

師（法然上人）と同じ

信心を得ていた人は少なかったので、

親鸞聖人が同じ（法然上人）のお弟子仲間の方々と論争されたことがあった。

そのわけは、

親鸞聖人が「善信（親鸞）の信心も法然上人のご信心も同一（同じ）である」と仰ったので、

勢観房・念仏房

「（それは）とんでもないことだ」と言い争われて、
達、もてのほかにあらそひたまひて、いかでか聖人の御信心に、
「どうして法然上人のご信心と、
善信房の信心が同一（同じ）であるはずがあろうか」と言われたので、
善信房の信心ひとつにはあるべきぞとさふらひければ、聖人の
（親鸞聖人は、）「法然
上人の知恵と学識の広さに対して（私がそれと）同一であると言ったのなら、それは間違いでしょうが、
御知恵才覚ひろくおはしますにひとつならんとまふさばこそひがごとならめ、往生の信心に
極楽浄土に往生する信心においては、
（法然上人と私は）まったく異なることはありません、
おいては、またくことなることなし、たゞひとつなりと御返答ありけれども、
ただひとつです」とお答えになったけれども、
なおも「どうしてそんな道理があるだろうか（そんなこと
が言えるだろうか）」という疑問と非難があったので、
なをいかでかその義あらんといふ疑難ありければ、
結局、
法然上人の御前で、
詮ずるところ、聖人の御まへにて、自他の是非をさだむべきに
両者の是非（どちらが正しく、どちらが間違っているか）を決めようということになり、

て、この子細（ことの仔細（詳細）をお話ししたところ、）をまふしあげければ、法然聖人（法然上人の仰られるには、）のおほせには、源空（法然）の信心も阿弥陀如来よりいただいた信心である。）が信心も如来よりたまはりたる信心なり。善信房（善信房（親鸞）の信心も阿弥陀如来よりいただかれた信心である。）の信心も如来よりたまはらせたまひたる信心なり。さればたゞひとつなり。（だから、まったく同一（同じ）である。）別の信心にておはしまさんひとは、源空（源空（法然）が行こうとする浄土へは、）がまひらんずる浄土へは、よもやまひらせたまひさふらはじと、おほせさふらひしかば、（よもや行くことはできまい」と、）当時の一向専修のひとぐ〳〵のなかにも、親鸞（仰られたことであるから、（仰られたことからもわかるように、））の御信心にひとつならぬ御こともさふらふらんと（別の信心を持っている人は、）（この頃、ひとむきに（ひたすら）念仏に打ち込む人々の中にも、）（親鸞聖人のご信心と同一（同じ）でない人もいるだろうと思われる。）

おぼえさふらふ。いづれも〳〵（以上のことは、）いづれもすべて老いの繰り言（老人の愚痴）ではあるけれども、（言わずにはおれないので）書き記したのである。繰り言にてさふらへども、かきつけさふらふなり。露命わづかに枯草のようなこの身体に残されていることではありますが、枯草の身にかゝりてさふらふほどにこそ、露のようにはかない命が、わずかに相伴って念仏を称える人々の、あひともなはしめたまふひとぐ〳〵、疑問をお聞きし、御不審をもうけたまはり、聖人の親鸞聖人の仰られた教えの趣旨をも、おほせのさふらひしおもむきをも、お聞かせすることもまふし（私が）できましょうが、きかせまひらせさふらへども閉死んで後は、さぞかし、（親鸞聖人の教えがさまざまに取り違えられ、）眼ののちは、さこそしどけなきしまりがなくなるであろうと、ことどもにてさふらはんずらめと、嘆かわしく思って、なげき存じさふらひて、かいま述べたような様々な趣旨（の異端の説）を、くのごとくの義ども、主張する人たちに、おほせら

れあひさふらふひとぐ〳〵にも、
言い惑わされるようなことがある時は、
いひまよはされなんどせらるゝ
ことのさふらはんときは、故聖
亡き親鸞聖人がお心にかなって用いられたご聖典などを、
人の御こゝろにあひかなひて御
もちゐさふらふ御聖教どもを、
よくよくご覧になられるがよい。
よく〳〵御覧さふらふべし。お
だいたい聖典には、
ほよそ聖教には、真実・権仮と
真実をそのまま説いた部分と真実に至るための手立てによって説かれた仮の部分が混じり合っているものである。
もにあひまじはりさふらふなり。
よって、権を捨てて実を取り、
仮を差し置いて真を用いること
権をすてゝ実をとり、仮をさし
と（仮の部分を捨て、真実の部分を取りだして用いること）が、
親鸞聖人のご
おきて真をもちゐるこそ、聖人
決して聖典を読み、
本心（本意にかなうこと）なのである。
の御本意にてさふらへ。かまへ
（その聖典を）読み誤ることのないようにし
てく〳〵聖教をみ、みだらせたま
（そこで）大切な証拠の文などを、
なければならない。
ふまじくさふらふ。大切の証文

少しばかり抜き出して、
ども、少々ぬきいでまひらせさ
真実を見分ける目安にして、
ふらふて、目やすにして、この
この書に添えておくのである。
書に添へまゐらせてさふらふ
親鸞聖人が常日頃からもうされていたことは、
なり。聖人のつねのおほせには、
「阿弥陀仏が五劫もの長い時間に渡って深く思索して導き出された本願の心をよくよく考えてみれば、
弥陀の五劫思惟の願をよくく
それはただひたすらこの親鸞一人を救うためのものであった。
案ずれば、ひとへに親鸞一人が
そのように考えれば、数えきれない罪業を持ったこの
ためなりけり。されば身それほど
身ではあるのに、
の業をもちける身にてありける
助け救おうと思いたってくださった阿弥陀仏の本願のなんとかたじけないことであるか」
を、たすけんとおぼしめしたち
と、
ける本願のかたじけなさよ、と
ご自身の思いを述べられたことを、
今また改めて
御述懐さふらひしことを、いま
考えてみると、
善導大師の、
「私自身は、今現在で
また案ずるに、善導の、自身は
も罪悪を重ねて生死の迷いの中にいる凡夫であり、
はるかに遠い
これ現に罪悪生死の凡夫、曠劫

昔（はじめもわからぬ過去生）から、
よりこのかた、
つねに流転して、
を持たない身であることを知れ」という金言と、
ことなき身としれといふ金言に、
少しも違わないのである。
すこしもたがはせおはしまさず。
そうであるなら、もったいなくも、
されば かたじけなく、
引き合いに出して（例にして）、
にひきかけて、
われらが身の罪
悪のふかきほどをもしらず、
阿弥陀如来のご恩がいかに高いかも知らないで迷っているのを、
如来の御恩のたかきことをもしら
ずしてまよへるを、
だったのである。
おもひしら
せんがためにてさふらひけり。
まことに（本当に）、阿弥陀如来のご恩ということを忘れて、
まことに如来の御恩といふこと
をばさたなくして、
私も他人も、
われもひと
も、
善いとか悪いとかいうことばかりを言い合っている。
よしあしといふことをのみ

常に（生死の迷いの中で）浮き沈みを繰り返し
この生死の迷いの世界から抜け出す手立て
つねにしづみ
出離の縁ある
親鸞聖人がご自身のことを
わが御身
私たちが自分自身の罪悪がいかに深いかも知らず、
私たちに思い知らせようとするため

まふしあへり。聖人（親鸞聖人が仰るには、）のおほせには、善悪（「私は善悪の二つについて、）のふたつ、総じてもて（まったく何も知らない。）存知せざるなり。そのゆへは（その理由は（なぜなら）、）、如来の御こゝろに善しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたはごと、まことあることなきに、たゞ念仏のみぞま

（善を知ったことになるだろう、）
（阿弥陀如来がお心に善いと思えるほど（徹底的）に知り抜いてこそ、）
（阿弥陀如来が悪いと思えるほど知り抜いたらば、）
（悪を知ったということになるけれども、）
（この身は煩悩だらけの凡夫であり、）
（この世は燃えさかる家のごとく無常ではかないものであるから、）
（すべてのことはみなうそと偽り、）
（真実など一つもないが、）
（ただ念仏だけが真実である」と仰ったことである。）

ことにておはしますとこそおほせはさふらひしか。まことに、（本当に、）われもひとも、（私も他の人も、）そらごとをのみまふしあひさふらふなかに、ひとついたましきことのさふらふなり。（うそばかりを言いあっている中に、）そのゆへは、念仏まふすについて、信心のおもむきをもたがひに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論をたゝんために、またくおほせにてなきことをもおほせとのみまふすこと、あさましくなげき存じさふらふなり。

（ひとつ嘆かわしいことがある。）

（それは（どういうことかというと）、念仏を称えることについて、）

（信心のあり方を互いに問答したり、）

（人に言い聞かせる時、）

（相手に一言もしゃべらせず、）

（議論を打ち切ろうとするために、）

（親鸞聖人がまったく仰らなかったを仰ったと言い張ることは、）

（あさましく嘆かわしく思われる。）

このことをよく考えて、
このむねをよくくおもひとき、
心得て（注意して）いただきたい。
こゝろえらるべきこととにさふら
ふ。これまで述べてきたことは、私の個人的な意見ということではないけれども、これさらにわたくしのこと
ばにあらずといへども、経典やその注釈書の経釈の
筋道も知らず、仏法を伝える文章の深い意味を理解したこと
ゆくぢもしらず、法文の浅深を
もないのだから、
こゝろえわけたることもさふら
きっとおかしいことであるだろうが、
はねば、さだめてをかしきこと
にてこそさふらはめども、亡き親鸞聖人古親
の仰ったご趣旨の、
鸞のおほせごとさふらひしおも
百分の一、ほんの一端を思い出して、
むき、百分が一つ、かたはしば
かりをもおもひいでまひらせて、
（まことに）悲しい
書き記したのである。
かきつけさふらふなり。かなし
幸いにも（せっかく）念仏しながら（念仏を称える身となりながら）、
ことではないか、
きかなや、さひはひに念仏しな

（この身が終わり）すぐに真実の極楽浄土に生まれず（往生せず）に、

がら、直に報土にむまれずして、

極楽浄土の辺地（辺界の地）に宿を取る（止まる）ことは。

辺地にやどをとらんこと。一室

同室の好し

の行者のなかに信心異なること

みを結んで念仏を称える者たち（浄土真宗の門徒）の中で信心が異なることのないように、

なからんために、なくくふで

涙にくれながら筆を取ってこれを書き記したのである。

を染めてこれをしるす。なづけ

名付けて「歎異抄」という。

て歎異抄といふべし。外見ある

むやみに見せるべきものではない（公にすべからず）。

べからず。

歎異抄・電子版

制作・編集 : 有限会社 DCP
広島市西区横川新町 6-6-1906
(C) 2023 DCP Corporation. All Right Reserved.